

山田美妙『平清盛』考：時代による古典文学再生産の様相

金， 潁我

九州大学大学院比較社会文化研究院：訪問研究員 | 高麗大学中日語文学科：博士課程

<https://doi.org/10.15017/1957705>

出版情報：九大日文．31，pp.2-14，2018-03-01．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：



山田美妙『平清盛』考

——時代による古典文学再生産の様相——

金 湊 我

一、はじめに

『^{史外}平清盛』(以下、『平清盛』^①)は山田美妙の死後、明治四十三年に千代田書房から発刊された作品で、青年期の清盛を描いている。ここで用いられている〈史外史伝〉は美妙の造語で、彼の歴史小説シリーズに付けられた名称でもある。『平清盛』以外にも『板東武者』・『小宰相局』・『平重衡』などがある。

一般的に清盛は『平家物語』で知られているが、この物語の中での清盛は究極の「悪人」として描かれている。そのためか、『平家物語』を素材とする近代以前の作品では、清盛を中心とするものは皆無である。近世の浄瑠璃や歌舞伎では重要なキャラクターとして登場はするが、その人柄は変わらず「悪人」と位置付けられており、『平家物語』の清盛像をそのまま引き継いでいる。しかし、近代に入ってから『平家物語』や清盛に関する新しい論評のほか、清盛を中心素材とする作品も現れるようになり、物語内での清盛像も次第に変わり始める。

古典文学を再生産する際の素材の用い方や選択は、近代を境

に大きく変化する。特に、アジアにおける近代化による西洋文化の流入は、類を見ない多様な変化を起こすものであった。『平家物語』では天皇から武士への権力移動とそれに伴う戦乱、その中で武士の活躍が描かれている。日本は近代化と同時に国際戦争の只中に積極的に立ち入った国であり、『平家物語』はそのような社会状況に影響されて時期に合わせた目的を持って読まれ、分析されるようになっていった。

美妙の『平清盛』に関する先行研究は数少ない。山田俊治は時代小説と歴史小説という観点から作品を分析し^②、橘田ますみ・小西教子は『平清盛』と執筆当時の美妙の状況を重ね合わせている^③。本稿では、時代による『平家物語』^④の論評の変化と美妙の『平清盛』を中心として、政治的な社会状況と古典文学が再生産される様相の影響関係を考察する。

二、「悪人」としての清盛

『平家物語』の清盛は、作品の冒頭から「悪人」として規定されている。『平家物語』巻第一「祇園精舎」では、次のように語られている。

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらへば、秦の超高、漢

の王莽、梁の周伊、唐の禄山、是等は皆旧主先皇の政にもしたがはず、樂しみをきはめ、諫をも思ひいれず、天下の乱れむ事をさとらずして、民間の愁ふる所を知らざッしかば、久しからずして、亡じにし者どもなり。近く本朝をうかがふに、承平の將門、天慶の純友、康和の義新、平治の信頼、此等はおごれる心もたけき事も、皆とりぐにこそありしかども、まぢかくは六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申しし人の有様、伝へ承るこそ、心も詞も及ばれぬ。

(巻第一「祇園精舎」一九頁)

ここで清盛は、中国と日本の「おごれる人」々と共に名前を挙げられている。これは、物語の冒頭で清盛の悪質な面を規定し、この性格のために滅びる運命にある人物であることを暗示している。そして、これは彼の悪行に対する必然の罰として、平家一門が滅亡へ向かつていくという、語りの前提を示すものでもある。しかし、平家が滅亡したのは決して清盛一人の責任ではなく、『平家物語』にも所々清盛の心境や立場からの弁論が含まれている。当時の清盛の行動は悪人のそれだったかもしれないが、決して無能ではなかったという清盛の両面性が、この作品では描かれているのである。

それにも関わらず、一般的に『平家物語』の清盛が「悪人」として記憶されているのは、この巻第一の冒頭から作られた「悪人」としてのフレームが非常に強力だからであろう。『平家物語』の清盛像に関する先行研究でも同じ点が指摘されている。

池田敬子は、清盛を好ましからざる人物として設定するために極端な方法が用いられていると論じている。平家滅亡という歴史的事実を物語化する過程においては、誰もが納得できる滅亡の理由と結末が必要であった。そこで、悪人である清盛が平家滅亡の理由としての役目を負わされたと言明している⁹⁾。

永積安明は清盛が白河天皇の子孫だとする説をもとに、平凡ではない血統を持つ人物でありながら平安時代の終わりと平家滅亡の責任を全て背負う悪人という二面性を持つ、矛盾の人物であると説明している。また、憎むべき人物として描かれているにも関わらず、(後白河院や仏法との関係性を度外視すると)清盛は常に正直で強い人間として描かれている点を強調した¹⁰⁾。渡辺貞麿も、清盛は初登場の時点から既に自分の悪行によって滅亡すべき人物として描かれていると指摘している¹¹⁾。

樋口大祐も同様の指摘をしており、清盛の悪行を王法と仏法との対立から作られたものであると整理し、彼の「おごり」の氣質と平家滅亡が因果関係によつて結ばれ、強力な一つの教訓として固着されていると論じている。また樋口は、この「悪人」としてのフレームの強度は近代に入ってから少しずつ弱まっていくなが、祇王や鹿ヶ谷事件の関係者など、特定の人物に対する悪行の伝承としては残り続けたと説明する¹²⁾。

以上の先行研究は、それぞれ論旨の方向性に多少の違いはあるものの、清盛像は物語の展開によつて構築されていくものではなく最初から決定されており、その「悪人」としての性格は物語の進行によつて次第に強くなつていくと指摘している点で

は共通している。

『平家物語』の冒頭によって、読み手は清盛の言葉や行動の全てが「悪」であると事前に認識することになる。また、物語内では清盛と対照的な性格を持つ長男重盛が登場し、清盛の悪の側面を更に強調している。重盛は清盛の行動を道德的・倫理的に間違っていると指摘し、正道から外れていると考えて常に忠告する立場にある。重盛は鹿ヶ谷事件の首謀者であった藤原成親に対する処分を思いとどまらせ（巻第二「小教訓」）、後白河院の幽閉を止めるように清盛を説得する（巻第二「教訓状」）。清盛もその都度重盛の忠告を聞き入れ態度を改めるが、これは清盛の短気で怒りっぽい、感情的な人物像を強調していると言える。

こうした清盛の悪癖とも言える側面は、助言役であった重盛の死後には誰も止めることができなくなり、本質的な「悪」へと発展していく。重盛の死後、清盛は後白河院を鳥羽殿に幽閉するとともに（巻第三「法皇被流」）、関白藤原基房や太政大臣藤原師長らを流刑に処し（巻第三「大臣流罪」）、遂には都を京都から福原へ移してしまう（巻第五「都遷」）。そして、五男重衡を指揮官として奈良を攻めさせ、寺を全て燃やしてしまう（巻第五「奈良炎上」）。清盛が立て続けに起こしたこれらの事件は、全て王法と仏法に逆らうものであると同時に、当時の慣習・倫理・道德など全ての社会的規範にも反するものでもあり、これによって清盛は完全な「悪人」として認知されるようになった。

清盛と重盛の対比は、清盛を「悪人」として作り上げるための重要な構成である。巻第一「殿下乗台」には、二人の性格の

差が克明に表れている。重盛の息子資盛は町で摂政藤原基房と遭遇するが礼を守らず、そのために基房の家来から屈辱を受けて帰ってくる。これを聞いて激怒した清盛は摂政の家来達を襲撃し、烏帽子を斬り落とす。一方で、後にこの顛末を知った重盛は、礼を守らなかった資盛が屈辱を受けるのは当たり前のことだとして、襲撃に参加した家来を叱りつけて処分を与えた。

このように、『平家物語』では清盛が事件を起こしたとされているが、史実では実際に襲撃を指示したのは重盛である。物語では重盛が登場する最初の事件で二人の役回りを取り換えることで、清盛の短気で怒りっぽい性格を読者に印象付ける。ここで二人の対照的な性格が更に強調され、「悪人」清盛を作り上げるための基礎が形作られる。これ以外にも、巻第一「祇王」⁹⁰には清盛の冷静さと、他人に配慮しない極めて自己中心的な性格が表れている。以上のことから、『平家物語』は徹底して清盛を「悪人」として作り上げるように構成された作品であると判断できる。

だが、全ての文献で『平家物語』のように清盛が「悪人」として描かれている訳ではない。『平家物語』と同じ時期に成立した『十訓抄』では、清盛は家来などに気配りし、貴族にも好感を持たれるような人物として描かれている⁹¹。仏教説話集である『発心集』でも清盛の能力は高く評価され、慈善行為にも携わる善良な為政者として描かれている⁹²。にも関わらず、一般的に清盛が「悪人」として認知されること、近代以前に清盛を中心素材とする作品が皆無であるということは、やはり『平

家物語』の冒頭から作り上げられた「悪人」清盛像の影響が強いためであると考えられる。

近代以前の文芸は能・歌舞伎・浄瑠璃などの舞台劇が多く、古典文学や誰もが知っている逸話から素材を得ることが主流であった。清盛に関する記録物は『平家物語』以外にも多数存在するが、平曲として語られた『平家物語』が一番知られているのは当然のことであり、他の記録物よりも『平家物語』が描く「悪人」清盛という人物像の印象が人々に強く残っているとも考えられる。謡曲の中でも、修羅能は主に源平の武士の逸話を素材とする。修羅能は戦乱で命を絶った武士が世の名残惜しさを解消し、成仏するという構成が取られている。時代的にも『平家物語』が成立した十三世紀は、平家と敵対していた源氏の支配力が依然強かったことから、「悪人」清盛というフレームを取り除くことは困難であったと思われる。

また、清盛の話は素材的にも共感を得ることが難しく、再生産の素材として向いていなかったとも推測される。歴史学者の辻善之助も、『平家物語』をはじめとした清盛に関する記録物が成立したのは清盛の敵対勢力の全盛期であったとして、清盛を論じるに当たって考慮すべき問題であると指摘している。¹²⁾

この「悪人」清盛というフレームはかなり長く続き、十八世紀に作られた近松門左衛門『平家女護島』でも、清盛は全ての人物と対立する「絶対悪」として登場する。鎌倉時代から江戸時代までの間に創作された御伽草子などの散文文学でも、清盛を素材とする作品は見当たらない。

だが、『平家物語』では清盛の悪い面だけが語られている訳ではない。清盛の立場からの主張もあり、清盛の能力や功績を讃める内容も散見される(第三節で詳述する)。ただ、近代以前にはその側面に注意が向けられることは少なかったのである。

三、一変する清盛像

ところが、近代に入ると『平家物語』や清盛に関する論評が現れ始め、清盛を中心素材とする作品も見られるようになった。時代が変わり、作品を創作する側と受容・享受する側が共に変化する中で、「悪人」清盛というフレームが少しずつ壊れ始めていったのである。

『平家物語』は明治以前には研究対象とはされなかった。注釈書や解説書はあったが、文学作品としてではなく野史として扱われ、歴史的事実の裏付けや比較、民俗学的観点から平安末期の生活習慣や服装などの参考資料にされる程度であった。明治維新以降、西洋文学と文芸思潮の流入への対応と民族主義の発現として、古典文学を含む国文学の教育が奨励されるようになった。しかし、その中でも『平家物語』は依然として古典文学として扱われてはいなかった。塩田良平は、明治二十六年発行の『帝国文庫』に『源平盛衰記』が収録されてはいたものの、当時の古典文学の範囲は平安王朝文学までであったため、『源平盛衰記』は古典文学として認められなかったと説明している。¹³⁾『平家物語』は『帝国文庫』に多数含まれていた西鶴の作

品と共に、市井において親しまれた通俗作品として扱われたのである。

『平家物語』を独立した文学作品として分析した論評が発表され始めたのは、一九〇〇年代に入ってからのことであった。この頃から、時代・社会背景の変化に伴って論評の様相や目的が次々と変化していく。『平家物語』の研究史と論評については既に多数の研究が発表され、時代別の区別や整理が行われている。ここでは、清盛が近代以降に作品の素材として使われるようになったのは、作品を読み・分析する視点の変化と大きく関係しているとみて、美妙の『平清盛』が発表された明治四十三年前後の論評を中心に考察してみることにする。

一九〇〇年代から戦前までの『平家物語』についての論評は大きく二つに分けられる。一つは西洋文物や文学に匹敵し得る叙事詩としての称揚を目的とした国威発揚的なもの、もう一つは、清盛や平家一門を歴史的・社会的観点から切り離し、独立した存在として評価するものである。後者については、武士や天皇家をめぐる権力構造の物語として『平家物語』を捉えるパースペクティブを抑圧する論評、と言い換えることもできるだろう。明治は武家政権が終わり、再び天皇制へと回帰する時期であった。武家政権の成立を描いた『平家物語』は、当時の覇権のイデオロギーと必然的に衝突することになった。そこで『平家物語』は、武士と貴族の対立を描いた、政治や歴史に関わる物語としてではなく、清盛や平家一門という独立した存在の物語として読まれるようになっていったのである。⁴⁰⁾

例として、藤岡作太郎の議論を取り上げてみたい。明治三十九年、藤岡は新旧勢力の対立によって日本社会が発展した革新期として大化・寿永・明治の三つの時期を挙げ、その中でも『平家物語』の背景となる寿永には特異な点があるとみた。院政による不安定な政権、相次いでいた戦乱など、一つの時代が終わりを迎えるようとしていた時期であり、その時代を生きてきた平家一門は「大闘争の犠牲」となったのだと論じる。

藤岡によれば、平安時代は文学・音楽・歌・政治など全てにおいて最高の時期であったが、当時の武士は学問でも文芸でも貴族に劣っていた。通常、時代の転換期には、政治権力闘争での勝者が文化面の変化においても主導権を握るものだが、寿永の場合、文人貴族から武人への権力移動の際にも、文芸や政治全般を貴族から教わるしかなかった。ここに平家の悲劇がある、と藤岡は説明している。⁴¹⁾

確かに、武士が政界に進出し始めた平安末期にこの傾向は強かったと言える。武家政権の基盤が整った後も、清盛は常に貴族と衝突が絶えなかった。清盛と貴族の関係は複雑であった。武士階級が貴族より政治・文芸などに劣っていることから、貴族は武士を常に見下していた。しかし、清盛は非凡な能力を持つ人物であり、その政治力で政治の頂点に立ってしまった。貴族は武士である清盛を蔑視しながらも彼の言葉に従うしかなく、清盛も貴族社会に立ち交わるにあたって彼らの文化や慣習を身に付ける必要があった。清盛が常に貴族や天皇と衝突したのは、異質な環境にあった二つの階級の位置が入れ替わる過程

で起きた反応であったのだ。

このような清盛の一生について、藤岡は「大人物の悲劇的な人生の標本」であると論じ、清盛を時代に先駆けて誕生した偉大な人物として評価する。そして、清盛のように壮大な人物も時代との衝突によって孤立し、悲劇的な結末を迎えてしまったのだとして、清盛や平家一門を被害者と位置付け、同情的な論調で結論付けている。⁽⁶⁾ 前節でも論じたことであるが、清盛は天皇と仏法との関係から「悪人」として規定されてきた。しかし、イデオロギーの衝突により、武士という社会的な立ち位置から離れて評価され始めたことで、清盛の人物像や能力が独立して評価されるようになったのである。

清盛像の変化は、『平家物語』を叙事詩としてみる論評とも関わっている。一九〇〇年代は明治維新以降、日本社会がある程度安定し始めた時期であった。西洋文物の輸入や新しい文化の受け容れが進む一方で、西洋文化への反発から民族主義を強く唱える声も現れた。そのような民族主義的発想からなされた取り組みの一つが、国語・国文学の教育と文学史の措定であった。そして、日本にも西洋に劣らない素晴らしい文学があるのだという主張の中で、古典叙事詩として名を挙げられたのが『平家物語』だったのである。

デイヴィッド・バイアロックは、明治三十九年の生田長江『国民的叙事詩としての『平家物語』』（『帝国文学』一三六、一三八号）、明治四十年の姉崎正治『時代の告白としての叙事詩』（『心の花』十一巻五号）、明治四十三年の岩野泡鳴『叙事詩としての『平家』

物語』』（『文章世界』五巻十四号など）について検討し、これらの

論評の共通点として民族主義的な傾向が強い点を挙げている。⁽⁷⁾ また、大津雄一は『平家物語大事典』の「叙事詩」の項目において、このジャンルに英雄物語の要素が含まれている点を指摘している。⁽⁸⁾ 英雄物語の主人公にもいくつかの条件が付くが、基本的には時代の転換期に力と能力、意志を持つ非凡な人物であること、冒険や難関によって成長しながら最後は頂点に立つことであろう。⁽⁹⁾ 明治三十四年に発表された高山樗牛『平相国』⁽²⁰⁾ は、清盛の才能や能力について挙げ、まさに英雄的な人物として評価している。この評価は、晩年の樗牛が天皇制を中心とするナショナリズムを批判し、個人の能力主義を主張していく一連の流れの中でなされたものであった。

- ①彼の心は常に洞々然として毫も晦所無し。願ふに天真爛漫の四字、以て彼れが心事を評すべし。 (四一四頁)
- ②彼はげに無邪気なりき。彼は其の生涯に於て殆ど其の素志に反して事を行ひたることあらざりき。重盛の諫言に従ひたるは恐らく其の唯一の例外なりしならむ。彼れの行ひは常に公々然たり洞々乎たり。 (四一七頁)
- ③彼は善人にもあらず、悪人にもあらず、唯一個の巨人、一個の快男に過ぎざりき。 (四一七四一八頁)
- ④彼れの一生は、彼れの主義、彼れの理想、彼れの自我の実現を以て貫通せられたり。 (四一八頁)
- ⑤嗚呼清盛、彼れは生まれて其の為さむと欲する所を為しき。

天下は彼れの意志に服従せり。彼は是の生涯に於て常に自ら安じ且つ自ら甘じたりき。惡逆無道の名を後世に流せりと雖も、彼れに於て素より遺憾なかるべきなり。吾人清盛の生を大なりとす。(四二〇・四二一頁)

以上のように、樗牛は清盛を単純かつ素直で、自分の欲望に忠実な、行動力のある人物であると断じている。樗牛による清盛の評価は、時代背景や天皇との関係などから清盛を切り離し、独立した個人として捉えることから生じている。これは、同じ時期に藤岡が『平家物語』を武士や戦乱の物語としてよりも、普遍性を持った作品であると論じた動きとも重なり合う。

明治以前の清盛像は、『平家物語』の冒頭から形作られた「悪人」というように集約されていた。このように清盛が「悪人」として描かれるのは、王法と仏法という、当時の社会的規範と規律を担当する公的存在との対立が主な原因である。しかし、明治維新によって武士を中心とした封建社会が崩壊し、天皇や仏法への畏敬のありようが変化した。天皇制への回帰により天皇に対する畏敬の念は幕府時代よりは強まっていたものの、当然ながらそれは平安末期のような絶対的な忠義や服従とは異なるものであった。また、一方では急激な中央集権化への反動として、天皇制への批判や反対の声も上がるようになっていた。

これに伴い、王法・仏法への反逆によって「悪人」とされた清盛像も弱まっていったのである。武士と戦乱の物語ではなく、人間の普遍性を持つ作品として『平家物語』が捉えられるよう

になった明治初期の状況とも相まって、清盛に対しても新しい側面からのアプローチが行われるようになったのである。藤岡や樗牛の論評は、土台となる思考・思想は異なっているが、共に清盛を個人として捉える視点を示しており、これは明治維新によって天皇への畏敬のありようが変化したことがもたらした、新たな視点であったと言える。

時期は少し異なるが、大正八年に歴史学者の辻善之助も、厳島・千疊閣での講義で樗牛と同じ趣旨の話をしている。²¹⁾ この講義は、清盛は果たして本当に「悪人」であったのかという問いかけから始まり、清盛が「悪人」と呼ばれるようになった事件や逸話などの前後関係を明示し、彼を擁護するものであった。清盛の行動は、当時としては「悪人」であると非難されるべき内容だったのかもしれないが、彼のような政治力を持つ人物の態度と立場から考えるとそれは妥当なことであり、これは善悪の問題ではないと論じた。辻は清盛を突然朝廷に登場して成り上がった人物ではなく、祖父の代から白河院の寵愛を受けていた、朝廷と馴染みある家柄の人物であったとして、清盛の出世における「真相」を明らかにしていく。その上で後白河院に対する清盛の非常識な態度についても、後白河院は軽薄で政治力のない、主君としては不足のある人柄であったとして、清盛に対しても特に冷淡な態度を取っていた点を指摘する。

そして、福原への都移りに関しては次の二つの理由を挙げる。まず、当時藤原氏の庇護の下に勢力を拡大していた、奈良の寺社と距離を置く必要があったこと。さらに、宋との貿易港を

大宰府よりも京都への交通の便に長けた兵庫へ移そうとする計画があつたことである。辻は『平家物語』には書かれていない当時の政情を把握し、清盛はそれらを全て考慮した上で行動したのであると論じた。清盛の行動の良し悪しは別として、彼の思想と先見性、政情を読む能力は非凡なものであつた、と高く評価したのである。⁽²⁾ 樗牛が清盛の本質的な性質を把握しようとしたのに対し、辻は実際の歴史記録をもとに、清盛はどのような人間、たつたのかを説明しようとしたと言える。

樗牛や辻が挙げた清盛の逸話は、多くが『平家物語』にも収録されている内容である。殿上乘合事件の場合、清盛の人物像を強調するために、清盛と重盛の役割が取り換えられているということは前述した通りである。また、源頼朝などを処刑せず、生かしたまま流刑としたのも良く知られている事実である。また、清盛に対する後白河院の不当な態度も、巻第三「法印問答」・「大臣流罪」などに描かれている。前にも確認したように、『平家物語』は作品の冒頭から清盛を「悪人」と決めつけていた作品ではあるが、物語の所々には清盛の立場からの主張も含まれている。これは、当時から清盛は「悪人」として評価されながらも、彼の類い稀な能力は認められていたということであろう。

清盛の非凡さは、彼の死後の逸話にも表れている。清盛の死は『平家物語』巻第六「入道死去」に描かれている。彼は病魔との闘いの後、苦痛に満ちた最期を迎えるが、皆はこれを悪行の罰が当たったためだと噂する。その後、清盛の出生と前生に関する逸話が収録されている。巻第六「築島」では清盛の死後

に起こった不思議な事件と清盛が築いた経島の話が記され、巻第六「慈心房」では清盛の前世は慈恵大師であり、天台宗の守護のために日本で転生したと示されている。そして、巻第六「祇園女御」では実際のところ、清盛が白河院の子孫であるという出生の秘密に関して触れられている。非凡な前世、天皇家の子孫であるかもしれないという出生の秘密、その業績を評価する死後の記述を見ると、英雄的な人物としての要素が多く見受けられるのである。

近代に入ってから、近代以前の「悪人」清盛というフレームから脱し、隠されていた清盛の一面が表に現れるようになる。これは全く新しいものではなく、『平家物語』や他の記録物に既に含まれていた内容であるが、近代以前には注目されていなかった。これが時代の変化に伴い、違う視点からのアプローチが行われるようになったことで、それまでの「悪人」清盛という人物像が次第に改められていったのである。全ての人間には善悪の両面が共存している。清盛にも多様な面が存在し、彼の業績自体は紛れもなく偉大なものである。当時の観点から判断すると悪行に映る行動も確かにあるが、究極の「悪人」と呼ばれる程ではないという視点からの批評が増え、「悪人」というフレームに隠された違う一面が注目されるようになったのである。樗牛と辻も、一個人としての清盛に重点を置き、これを論じている。こうした流れの中で、一九〇〇年代から清盛を中心素材とする作品が多く発表され始めていくことになるのだが、この初期に発表された作品が美妙の『平清盛』である。

四、清盛成長の記録——山田美妙『平清盛』

美妙の『平清盛』は厳密に言うると、『平家物語』には現れていない清盛の青年期、保元の乱の前後の清盛に注目している。美妙は『平家物語』によつて「悪人」と規定される前の若き頃の清盛が、どのような環境や地位に置かれ、何を考えてどのような経験をし、その結果いかなる志を持つようになったかを語り、不遇から這い上がりとする清盛の姿を描いている。

美妙の清盛は三十を過ぎたのに出世もできず、貧乏で、みすばらしい姿である。清盛は物乞いのために中御門（藤原家成）の邸に行く道中、阿闍梨祐信と出会う。清盛は彼に欠点を指摘され、厳しく叱責されるが、何も言い返せずに落ち込む。しかし、阿闍梨はきつい言葉を放つたものの、清盛が白河院の子孫ということを知っており、努力次第では大成するかもしれないと付け加える。清盛も自分の出生に対しては以前よりそれとなく勘付いており、阿闍梨の言葉は清盛が自覚するきっかけとなる。清盛は阿闍梨の言葉と父忠盛の死を契機に貧困から脱し、立身しようと決意する。その後、清盛は藤原秀方の推薦で南殿に現れる化物（実は巨大な鼠）を退治したことを足掛かりに、少しずつ出世の道を歩み始める。保元の乱の際には後白河院側だった清盛が、乱が終わった後、敵対する崇徳院側に立っていた叔父忠正とその息子を自ら処刑するところで物語は終わる。

美妙は青年期の清盛を、自我は強いがまだ何をどうして良いのか分からない、優柔不断で未熟な人物として描いている。そ

こから彼が出世の道を歩み始め、成功への欲望が次第に大きくなるにつれて人柄が変わっていく様を描いている。美妙は貧困から脱したいと決意した時の清盛の心境や感情、様々な事件や人との出会いによる変化の過程を描き、ただの悪人ではない人間としての清盛を作り上げていくのである。美妙は人情あふれる清盛を描くために幾つかの逸話を用いており、その一つが狐親子の話である。

清盛胸は只躍った。されば狐と見た以上、もう此方から進まれぬ。進めば狐は逃げて仕舞ふ。

立ち縮みに足を駐めて、又しても口の内で神仏を繰り返す。

狐は此方を見詰めて居る。

灰色の毛のやゝ交った老狐である。牝の腹が下がって頸筋が痩せて居る。

と見る間、一疋と思つたのは二疋に殖えた。同じやうな大きなるが又一疋、牡か知ら。否、否、否、またその上に一疋出た。子狐である。

天の与へか、吁、三疋！ 偕こそな神仏の御加護か。

（中略）

そろ／＼弓に箭を番へた。

親狐は音を揃へて異様な呻り声出した。

きり／＼と弓絞った。

親狐は——親のその牝狐はわが腹の下へと子狐を掻き入

れた。

親のその牡狐は前屈みになつて両手を揃へて、牙を張り目を怒らして、射らば射よ、射抜かれたら射抜かれたで、射抜かれた儘の血の身体で汝清盛めに喰ひ附いて、咽喉笛に孔開けて呉れるぞよと、宛も言ふかとの気色である。

何の狐の二疋や三疋、怖ろしい所は無い。但し、見す／＼其三疋の、死の瀕した末期の憂苦に絶望の意気を閃めかすかと思ふと、すはや容易ならぬ気持ちとする。

「うんむ、無理も無いわよ、な」と清盛腹から搾り出した。

腹から搾り出すと均しく、何と無い涙が又眼からも潤み出る。

「無慚ぢやな。射れぬわよ！」と弓持つ拳震はせた。

(二二〇—二二一頁) (23)

鎧に必要な狐の皮を得るために狐狩りへと出た清盛は、三匹の親子狐を見つける。そして弓を引こうとした瞬間、子狐を庇う親狐を見て、清盛は狩りを諦めてしまうのである。後にこの話を聞いた鎧の名人は、清盛の慈悲の心を武士である前に人間として持つべき心であると褒める。この狐に関する逸話は創作であるが、前述した『十訓抄』や『発心集』などに描かれている清盛の人物像に通じるものがある。

清盛の出世における最大のきっかけは、保元の乱後に叔父忠正を自ら処刑したことであろう。この場面は小説の結末部とも

なっているが、『保元物語』におけるこの場面について、山田俊治は出世に目が眩んだ清盛の腹黒さが表れていると読み、²⁴⁾

郭順伊は義朝に自分の父を切らせようとするための清盛の策略であると分析している。²⁵⁾ しかし、美妙はこの場面で謀略を巡らせた人物を清盛ではなく、彼の家人である家貞に変更している。

家貞は忠盛の代から平家に仕え、常に清盛のための行動を心がけている人物である。この作品での家貞の役割は二つあり、常に清盛に付き従つて彼へ知恵を貸すこと、そして成功と出世の道を歩み始めた清盛に政界での生き方を教えることである。美妙がライバルである義朝を落とすための策略を清盛自ら考えたものではなく、家貞の策略によるものだとしたのは、清盛をまだ一人前になつていない、未熟で人情に流されやすい人物として描こうとしているからである。そして、この作品の最後で清盛は叔父を処刑し、出世の道へと歩み出すのである。

美妙の清盛は、決して善人でも優しい人物でもない。しかし『平家物語』によつて作られた「悪人」としての清盛でもない。生まれつきの「悪人」という従来のフレームから少しずつ脱却していく人間としての清盛である。美妙は、成功の道を歩む前、未熟で不器用、そして優柔不断だった知られざる時期の清盛を描くことで、清盛が生まれつきの「悪人」ではなく、普通の人間だったと示したかったのではないだろうか。

美妙が清盛の新しい一面を引き出したのは確かであるが、前述したように『平家物語』でも清盛の悪行ばかりが語られているわけではない。しかし、冒頭における印象があまりにも強く、

時代的・政治的理由からも、「悪人」としての清盛を強調するしかなかったと考えるのが妥当であろう。美妙の試みは、樗牛や辻が隠されていた清盛の一面に注目したのと同様、それまでの常識とは異なる清盛の青年期を描き、『平家物語』では看過されていた清盛の別の一面を浮き彫りにすることで、新たな清盛像を生み出そうとするものであった。

美妙の清盛像は『平家物語』から作られた清盛のイメージとは異なるものであるが、これは時代の変遷による人々の価値観や観点の変化からも影響を受けている。前述のように、近代以前の「悪人」としての清盛像は、武士という階級・職務と天皇との関係によって生じたものであった。清盛の物語は、平安末期の政治状況、階級社会の中、天皇家や藤原氏との関係から離れて考えることは困難であった。その当時の時代性、関係性から考えると、清盛は「悪人」でしかなかった人物である。一方で一九〇〇年代は、天皇に権力が戻ったとはいえ、以前のように絶対的な忠義などがあるわけではなく、階級社会も終わりを迎えていた。そこで、清盛も一人の人間として見られるようになったのである。

美妙は政界に入る直前の青年期の清盛、言わば『人間清盛』の姿を描いている。狐への同情心や叔父の処刑に戸惑うなどの姿は、武士という立場を得る以前の、人間としての清盛を強調するものであると考えられる。これは、三節で触れた藤岡が、『平家物語』は武士の文学である以前に人間の悲しみと哀愁への普遍性を持つ作品であるとし、清盛についても、権力を握っ

た武家勢力の象徴としてではなく一人の人間として捉え、彼の成功と失敗は彼一人のものであると述べていたことと近いものである。

美妙の作品以降、清盛に対して同様の捉え方をした作品が次々と登場したことからも、明治期における『平家物語』受容傾向の一つの変化、すなわち『武士清盛から人間清盛へ』という動向を確認することができる。美妙の他の作品である「祇王」⁽²⁶⁾でも、清盛はこれと同様の切り口で語られている。「祇王」の発表時期は不明であるが、武者小路実篤「清盛と仏御前」(原題「仏御前」白樺「四巻十二号、大正二年十二月」と類似性が高い。両者ともに『平家物語』をそのまま用い、登場人物のセリフを少し加えるという手法で新たな清盛像を作り上げている⁽²⁷⁾)。用いられる素材や事件、人物との関係によつては、以前と同じく「悪人」として描かれる作品もあるが、近代に入つて清盛は『平家物語』における「悪人」というフレームから外れた人物として、多くの作品に用いられるようになっていったと言えるだろう。

五、おわりに

古典文学は時代を問わず、作品の素材として幅広く使われ続けて来た。その場合、作家の単純な関心や疑問によるものの、既存の評価を改めようとする意図が込められたもの、もしくは作家自身の価値観や思想を語ることを目的としたものなど、動機は多種多様に及んでいる。そして、その変容の様相と意味と

目的は時代によつて異なるありようを示している。『平家物語』に関して言えば、変化の起点となつたのは近代化であつた。『平家物語』は明治維新という大きな時代の転換と、当時の国家が直面していた国際戦争などの状況に應じて、様々な側面から評論され、清盛や平家一門が新しい観点より捉え直されることとなつた。『平家物語』の数多い登場人物の中でも、特に清盛に関して、近代以前と以後の人物像の変化が大きかつたと言えるだろう。清盛を素材とする作品が近代以後に書かれ始めたのは、こうした時代的な背景と大きく関係があると考えられるのである。そのような流れの中で、美妙は『平家物語』や近代以前とは違う清盛像を新しく作り上げたのであつた。

【注記】

- 1 引用は『明治文学全集』第二十三卷（筑摩書房、一九七一年八月）による。なお、旧字体は通行の字体に改めた。
- 2 山田俊治「時代小説としての山田美妙『平清盛』」『国文学 解釈と教材の研究』四十七巻十三号、二〇〇二年十一月
- 3 美妙は早くから文壇において名を挙げるが、売春婦との交際が問題となり、名誉も地位も財産も失う。三十代後半になつてからはサラリーマンとして安定した生活を始め、それから死去するまで六年間にわたつて歴史小説を書き続けた。（橘田ますみ・小西教子「平清盛」山田美妙の歴史小説『東京成徳国文』七号、一九八四年三月、三四頁）
- 4 『平家物語』①『新編日本古典文学全集』第四十五巻、小学館、一九九四年六月。なお、当該全集の本文は覚一本を底本としている。

- 5 池田敬子「悪行の道程——平家の清盛」『大阪工業大学紀要・人文社会篇』三十六巻二号、一九九二年三月、一五一—一五二頁
- 6 永積安明「平清盛——平家物語における」『日本文学研究資料叢書 平家物語』有精堂、一九六九年十二月、一五〇—一五六頁
- 7 渡辺貞麿「平家物語に現れる清盛像の二面」『大谷学報』四十巻四号、一九六一年三月、二四—二五頁
- 8 樋口大祐「清盛の「悪行」を読みかえる——王法・仏法と海港の論理」『日本文学』五十四巻一号、二〇〇五年一月、一二—一九頁
- 9 祇王説話は多くの先行論で、女性往生譚と清盛の性格設定の二点から分析されている。『平家物語』の全ての異本に収録されているわけではなく、その位置も異本によつて異なっているが、内容的には作品の冒頭から清盛の性格の悪辣さを明確にする目的を持つていとみられる。
- 10 『十訓抄』『新編日本古典文学全集』第五十巻、小学館、一九九七年十二月、三三六—三三七頁
- 11 『撰集抄・発心集・宝物集』『大日本佛教全書』第一四七巻、大法輪閣、二〇〇七年一月、一八三—一八五頁
- 12 辻善之助「平清盛論」『日本文化史』別録一、春秋社、一九七〇年六月、一四一—一四二頁（一九一九年、巖島・千景閣での講義。一九二五年補訂）
- 13 塩田良平「古典と明治以後の文学」『岩波講座 日本文学史』第十四巻、岩波書店、一九五九年五月、三四頁
- 14 なお、第二次世界大戦中には「武士の文学」という点に重点が置かれ、武士としての役割・義理・犠牲などが強調され、戦争に出る若者を鼓舞する目的で利用された。戦後には再び「武士の文学」とは呼ばれなくなり、戦前と同様に人間の悲哀、悲しみを描いた普遍性を持つ作品という

評論に戻る。戦前がイデオロギーの衝突と個人主義の発現、民族主義などによるものであるとしたら、戦後にはマルクス主義の影響を受けた、階級によらず誰しもに親しまれた作品という位置付けでの分析が主流となる(デイヴィッド・バイアロック、岩谷幹子訳『国民的叙事詩の発見』

(ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典——カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社、一九九九年四月、一二八―七五頁)、天津雄一「戦時下の『平家物語』『国語と国文学』八十五卷十一号、二〇〇八年十一月、四五―四六頁)

15 「平家物語」『帝国文学』十三卷五号。本稿では『明治文学全集』第四十四卷(筑摩書房、一九六八年十二月)を参照した。

16 前掲注15、三八六頁

17 前掲注14

18 大津雄一他編『平家物語大事典』東京書籍、二〇一〇年十一月、八〇一頁
英雄の定義は文化・時代別に大きく異なり、一つにまとめるのは極めて難しい。生田や岩野などは、影響を受けた西洋叙述詩として、ホーマーの「オデッセイ」や「ニールンゲンの歌」などの名前を挙げている。

両者とも、一人の少年が冒険に出て様々な苦難を克服し、最後は頂点に立つというストーリーが基本となる。石母田正は古代の英雄は国や集団の形成と密接に関係していると述べ、英雄とはすなわち侵略によって領土を広めるなど支配者としての気質がある人物であると説明している(石母田正『古代貴族の英雄時代』『論集史学』三省堂、一九四八年十二月。本稿では『石母田正著作集』第十卷(岩波書店、一九八九年八月)を参照した)。「中世文学に現われた英雄像」『国文学』十二卷四号、一九六七年三月)では、英雄像として平清盛をはじめ、平重盛・平知盛・

源義家・源頼朝・木曾義仲などの人物を挙げている。英雄の意味と正義は改めて整理する必要があるが、清盛が英雄とみなされるのは、人より優れた非凡な能力を持つ人物であることが主な理由であろう。

20 高山樗牛『平相国』『樗牛全集』第三卷、博文館、一九二六年十一月

21 前掲注12

22 前掲注12

23 前掲注1

24 前掲注2

25 郭順伊『保元物語』に見る平清盛『広島女学院国語国文学誌』三十七号、二〇〇七年十二月、五五頁

26 「祇王」の執筆時期は不明だが、清盛に関する描写の手法から判断するに、明治四十三年に出版された『平清盛』と同時期であると推測される。

27 『平家物語』の巻第一に収録されている「祇王」の話は、清盛の性格を紹介するエピソードとされる(前掲注9参照)。長年にわたって寵愛していた祇王を簡単に見捨て、仏御前に乗り換えた清盛を、人情のない冷淡で酷薄な人物として描いている。武者小路はこの逸話を逆に利用し、捨てられた祇王や仏御前に、清盛のことを憎んでなどおらず、むしろ尊敬するしかない人物であると語らせている。

【付記】

本稿は「近現代文学と東アジア」研究会第六回合同研究会(二〇一八年一月十九日、於九州大学)における発表に加筆、修正を行ったものである。
(九州大学大学院比較社会文化研究院訪問研究員、韓国・高麗大学中日語文学科博士課程)